

《実践報告》

## 演劇表現によるワークショップの可能性

—豊かな想像力と表現力を育むために—

久米 ナナ子 (現代教育研究所研究員)

### はじめに

2017年6月、人間社会学部初等教育学科3年次「表現指導法演習」の講義において、演劇の特質を用いて表現を考えるワークショップを行った。参加者は履修学生34名である。ほとんどの学生が演劇は初めての経験であった。

居心地の悪い表情を見せていた学生達も、ひとつひとつの課題に向き合うことで緊張がほぐれ、不安がなくなっていったようである。終盤には積極的に課題に取り組む姿勢が見てとれた。自発的に問題を解決しようとする活力を感じさせた。

今回の参加型授業である表現ワークショップの成果を通して、今後の課題も踏まえ、「演劇を用いたワークショップ」の可能性を探求していきたいと思う。

### 2 ワークショップの概要

演劇表現を活かしての表現ワークショップは2週に渡って行われた。1週目は「表現を感じる」をワークショップの軸に、参加者が、それぞれの課題に取り組める形式をとった。「感情を想像する」や「自分に気づく」など、普段の生活の中でじっくり考える機会はないであろう。ワークショップ1週目では、感性を研ぎすまし自己に集中する気持を参加者たちに求めた。

2週目は「戯曲を表現する」をテーマとして進めた。参加者はグループに分かれ、実際の戯曲を各グループで話し合いながら場面を創造し上演することに挑戦した。

このような体験型講座では、実際の課題に入るまえに簡単なゲームや自己紹介などをおこなうことが望ましい。参加する人達の緊張をほぐしながら、お互いのコミュニケーションを円滑に進めることが可能になる。今回のワークショップでは、1回90分という時間の制限と学生達が初対面ではないという認識から、上演に向けて速やかに課題に取り組んでもらうことにした。

### 3 ワークショップ1週目

#### 3-1 声で感情を表現しよう

##### 課題

状況を想像しなさい。そのまま動かず「あー」という声のみで表現しなさい。

- ①楽しい 満足して愉快的気分／快い
- ②寂しい 孤独を感じる／ひっそりとして心細い

課題は、想像してもらいたい感情をそれぞれに問いかけるか、紙などに書き個々に手渡す方法で行う。普段なにげなく思っている気持を「声」のみで表現する課題である。

参加者は、声を出すことに、初めは恥ずかしさから戸惑うが、同時に与えられた課題の状況を記憶の中から選択し、声として発しようと試みる。心の動きと体の緊張の関係に各自が気づき出すのである。

### 3-2 誰かになってみよう

#### 課題例

あなたのお母様になって次の感情を「こんにちは」という言葉を使って表現しなさい。

- ①喜ばしい 快く／楽しい
- ②がっかりする 落胆する／疲れて気が抜ける

この課題は演劇の特質でもある「演じる」を試みるエクササイズである。「演じる」は、身体表現である。自分からはじまり「何者かになる」ことである。我々は「喜ばしい」や「がっかり」な気持ちを日常無意識に表に現しているはずである。感情を自分ではない者になって表現する。当然そこには想像するための豊かな発想力が求められるのである。

### 3-3 言葉を感じてみる

#### 課題

①  
長い月日が過ぎました  
あなたは子供の頃の部屋にもどってきます  
長旅のあとで  
あなたは扉の前にたたずみ  
その扉をあけます  
どうやってあけますか？  
どうやって入りますか？

②  
部屋のなかに入り見渡してみましよう  
何もかわってない？  
みんなもとのまま？  
あなたは  
子供の頃にいちばん大切にしていた  
あるものを見つけます  
それを手にとり  
「…」  
そしてあなたは部屋を去ります

記憶をたどる詩がゆっくりと読み上げられる。課題例文は一行ごとに間をとって読むようにする。素直に読み上げることが大切である。言葉をしっかりと聴く者の心に届けることだけを心掛ける。語られる物語は、聴く者の想像力を豊かに膨らませるように、できるだけ抽象的な方が良い。①の部分では、参加者は静かに朗読を聞きながら情景を思い浮かべ「動き」を想像する。個々の感受性に刺激

を与え、言葉から感じる力に全身を集中させる。気持ちが整ったところで、②の情景の読みに移る。参加者は①で思い浮かべたイメージを実際の動作に変えていく。②の読みの「…」では、①を通して各人の中でわき上がったイメージを短い言葉にしてもらい。ひとりごとでも叫びでも良い。感じるままに、自らを見つめ直すように「わたし」を素直に表現することが大切である。

## ワークショップ風景 1週目 課題に取り組む



写真1：ワークショップの冒頭、演劇についての話を聞く学生達。



写真2：「声で感情を表現する」課題に取り組む。

## 4 ワークショップ2週目

### 4-1 言葉とからだで表現する

#### 課題戯曲：

「贗作・桜の森野満開の下」冒頭の場面より抜粋

#### 〈戯曲選択のために〉

戯曲とは、上演することを念頭に置き書かれた演劇の台本である。話し言葉である「せりふ」から構成され、主に人物の会話で物語を展開させるものである。

参加者の大多数が本格的に俳優修業を考えてないのであれば、選択する戯曲は、できるだけ観念的で普遍性をもっているものが望ましい。例えば、設定が架空の場所であり、人物像も明確に説明されないなどが好ましい。曖昧な描写と思われる物語の筋書きで参加者の発想は広がり、それぞれの想像力を鍛え発展させるからである。

今回のワークショップでは、野田秀樹作「贗作・桜の森の満開の下」のを選んだ。冒頭の場面を抜粋し、ワークショップの上演条件に合わせて人物名などを一部変更することにした。

#### 〈物語として戯曲を読む〉

ワークショップでは初めて演劇の戯曲を読む者も多いが、詳しい説明などせず、まずは黙読をもらう。場面でなにが起こるのか潜在意識なしに読み取ってもらうためである。

音読に移る。人数によってはグループに分けても良い。すべての人物を全員で一緒に読み上げる。読む抑揚などはつけずに、素直に全体に書いてあることをだけを読んでもらう。音読は、声を出して自分自身に説明するように、想像力を意識的に働かしてもらう。眠っていた自己の五感に語りかけるように読んでみるのが大切である。

### 〈戯曲を表現する〉

いよいよ台本に書かれた人物になって読んでもらう。当てられた役柄を想像し自由に自分の考えで「せりふ」に気持ちを込めてもらう。「何者かになる・演じる」という演劇の特質を十二分に体感してもらう。

指導するものは、表現は特別な行為ではないことを念頭に、新しい表現の発見をしてもらうように働きかけなければならない。

グループに分かれての話し合いのために、十分な時間を費やすことを忘れてはならない。イメージを共有する作業と、お互いの考えを深めていくことに、ゆとりを持って取り組んでももらうためである。

### ワークショップ風景 2週目 話し合い



写真3



写真4

30分という短い時間のなかでもグループに分かれ創作について活発に話し合いが行われた。

### 4-2 演劇を上演する

「贗作・桜の森の満開の下」上演条件として

(演出)

- ① 人物像を決める
- ② 配役の構成は自由

(舞台美術)

- ① 教室内の椅子を2脚以上使用すること
- ② 紐または長いものを使って森を表現すること

(音楽・効果音)

- ① 楽器、または音を発するものを使うこと

(衣裳)

- ① 身につけるもので、性質や性格がわかるように心懸けること

### 〈舞台創作について〉

演劇を上演する場所は「舞台」とよばれる。また、忘れてはならないひとつに「観客」のいる観客席がある。俳優と観客は劇場のなかで表現を共有していくのである。

ワークショップでは、教室を舞台と考えて「森」のシーンを教室のなかで表現することにした。舞台創作を短時間で的確に進めるために、演出、美術、音楽、衣裳製作の項目には幾つかの条件を与えることにした。

### 〈演出について〉

演出は、演劇上演を統一させていく重要な役割を務めるものである。演出することは、上演創作の大局的な見地に立ちながら、異なったイメージや、違った役目を持つ者たちを同じ方向にまとめていく総合力が求められる。

英国の有名なシェイクスピアの戯曲「お気に召すまま」に「全世界が一つの舞台、そこでは男女を問わぬ、人間すべて役者に過ぎない」という台詞がある。人生はまるで己を演じる舞台であると云うのだ。我々は日々の暮らしなかで上手く他者と共存するために、意識せずに自分を演出し演じることは多々あるだろう。演出するとは、人生の傍観者になる視点を持つことでもある。

演出のエッセンスを知ることは、社会の中で人間関係を円滑にするためにも非常に役立つものである。ここで改めて指摘しておきたい。

### 〈物語を演じるために〉

演劇を専門としない参加者にとって「上演」とは堅苦しく聞こえるかもしれないが、まずは気負わず取り組むのが良いであろう。上演のために条件を与えることは、より演出的な観点から物語を発展させることが可能になる。

ワークショップの参加仲間と共に、異なる価値観からの新奇なイメージの発見や発展を経験し、言葉を立体的に身体で構成していくことを楽しんでもらうことが重要である。

## ワークショップ風景 2週目 戯曲を上演する



写真5：椅子の上に一人が立つことで人物像の対比を表現できることに気づいた。場面の中には減り張りでき物語の進展に躍動感を与えることになった。



写真6：登場人物が床に座るようにした。また、衣装の色でグループ分けをする演出も試みた。伝えたいことがより明確になっていくことを学生たちは実感した。





写真7：ロープを床に鋭角に置くことや椅子の位置を有効に利用することでも教室に森を十分に表現できることを学んだ。

## 5 演劇表現によるワークショップを終えて

履修した学生たちは、最終の上演を通して、「言葉」は感情を持ち物語が身体で描き表現されていく過程を実感したであろう。戯曲のなかに書かれた人物の気持と、物語が醸し出す時空間を想像しながら実際に創作することは刺激的であったと推測する。演劇表現によるワークショップでは、計画した課題項目を達成することは大切にすべきだが、参加者に成果を求めすぎてはならないと考える。演劇に取り組みながらの表現にも興味を持ってもらうことが大切なのである。意見の違いに戸惑いを感じる学生もいたが、話し合いで創作の方向が決まってくると、協力する前向きな姿勢が確認できた。共同作業に自ら参加しようとする意欲が認められたのである。

意見が混乱して先に進めなくなっていることもあったので、学生たちの話し合いには積極的に関わることを心掛けた。あえて違う観点を示唆する指導も重要であった。多面的にそれぞれの感性に語りかけていくことが大切だったと考える。

「表現」はとても繊細である。心のなかを具体化させていく過程は、ともすれば苦しい気持を思い出すことになるだろう。指導する者は、参加者の「心の動き」に敏感でなければならない。無理に課題を押しつけることは避け、「表現は楽しい」と思ってもらうように努力すべきである。

演劇のなかで「演技」は舞台という場所で行われる身体表現でもある。しかしながら、我々は自分を表現しようと、多かれ少なかれ「演じる」ことを日頃から自然に行っているのではないだろうか。表現はけして特別な行為ではないと考えられる。今回は初等教育学科での表現ワークショップであった。教育者や指導者を志す学生たちには、表現に親しむ機会を多く持ってもらいたい。他者を敬う気持を大切に、自由に、「演じる」から発想を広げていってもらいたいと考えている。

## 6 ワークショップを終えて（学生たちの感想から）

- グループで何か表現するときは、イメージの共有がすごく大切なのだと改めて気づくことができた。
- 内面的に気持ちをまずはしっかりと作ることで自然と表現されて気持ちが伝わるのがわかった。
- 大切なことは皆とイメージを共有することだと実感した。

- 言葉のみで感情を表現する課題では、普段自分がいかに言葉に頼ってコミュニケーションを取っているのかを感じました。
- 言葉に感情を込めて伝えることは、とても大変なことだと学んだ。
- セリフを言う友達も声の高さや速さを工夫している様子が見られ、イメージをどう表現するのか考えることができた。
- 表現するということの難しさや奥深さ、また、たのしさを改めて感じた。
- 演劇における視覚的情報の重要性を感じた。
- 共通のイメージを決め、一つの作品を作り上げるおもしろさも感じられた。
- 同じ文章でも解釈の仕方や演じ方によって全く違う世界が生まれ、自分なりに解釈をしっかりとすることやイメージを濃くすることの大切さが分かった。
- 保育者の立場になったときに、決まったテーマを与えるのではなく子ども達のイメージを劇に組み込むことができるような方法が面白いと考えた。
- 一人ひとりの考え方、感じ方の違い、それをどのようにして1つにまとめ上げるかという難しさを学んだ。

## 8 ワークショップの成果と今後の課題

学生たちからは、演劇を通して、人間の情意というものを主体的に考察しようとする姿勢が見てとれた。また、対話やディスカッションでチームワークを保ち、新たな方向性を円滑に見いだそうとする意欲を示した。価値観の違う考えを理解し、他者と情報を共有する経験は、「表現」を深く考える機会になったとも考えられる。主体性を育みながら想像力を豊かにする可能性を十分に確信させる内容になった。演じることは、自分のなかでイメージの選別をしていくこと、自問自答である。その上で、作品の主軸を豊かにしていくために、他者とイメージを共有する努力しなければならない。上演は、大勢の人が価値観の違いを超越して円滑なコミュニケーションを維持することが常に求められる。舞台芸術の創作は、お互いの気持ちを伝え、それを理解しようとする力を養うためにも優れていると実感できた。

既にワークショップ概要で述べたが、体験型講座では「人前でなにかをする」という緊張をほぐすために、時間をとり簡単なゲームや自己紹介などをおこなうことが望ましい。今回のワークショップは、参加者が34名で1回90分という時間制限と、学生達が初対面ではないことから、直ぐに演劇表現の課題に取り組んでもらうことにした。しかしながら、慣れた相手でも自分らしく演劇表現に取り組むことは容易ではないと思われる。参加者の相互関係を深める観点からも交流の時間は充実させるべきである。

今後は、既存の戯曲からの上演ではなく、参加者自ら身近な出来事などで演劇台本を製作し上演まで体験できるよう内容と時間配分の考慮に力を尽くしたい。さらに豊かな「表現力」を追求する演劇ワークショップを提案する必要性を感じている。また、グローバル化に伴い、例えば英語教育においても、相互コミュニケーション能力を高めるという視点から、演劇を活かしたワークショップの可能性を模索したい。

引用・参考文献

折口信夫（1991）『日本藝能史六講』講談社学術文庫.

千田是也（1966）『演劇入門』岩波新書.

久保栄（1976）『久保栄演技論講義』三一書房.

福田恆存（1981）『演劇入門』玉川大学出版部.

福田恆存・ほか編（1991）『シェイクスピア ハンドブック』三省堂.

岡田陽（1998）『オンデマンド版 子どもの表現活動』玉川大学出版部.

野田秀樹（1992）『贗作・桜の森の満開の下』新潮社.

Geraldine B Siks（1958）. Creative Dramatics. Harper & Row.（ジェラルディン・B・シックス 岡田陽・高橋孝一（訳）（1973）. 子どものための創造教育 玉川大学出版部）

Brian Way（1977）. Development through Drama. Longman Group Ltd.（ブライアン・ウィン 岡田陽・高橋美智（訳）（2003）. ドラマによる表現教育 玉川大学出版部）

William Shakespeare. As You Like It.（ウィリアム・シェイクスピア 福田恆存（訳）（1967）. シェイクスピア全集 9 お気に召すまま 新潮社出版） p.65.